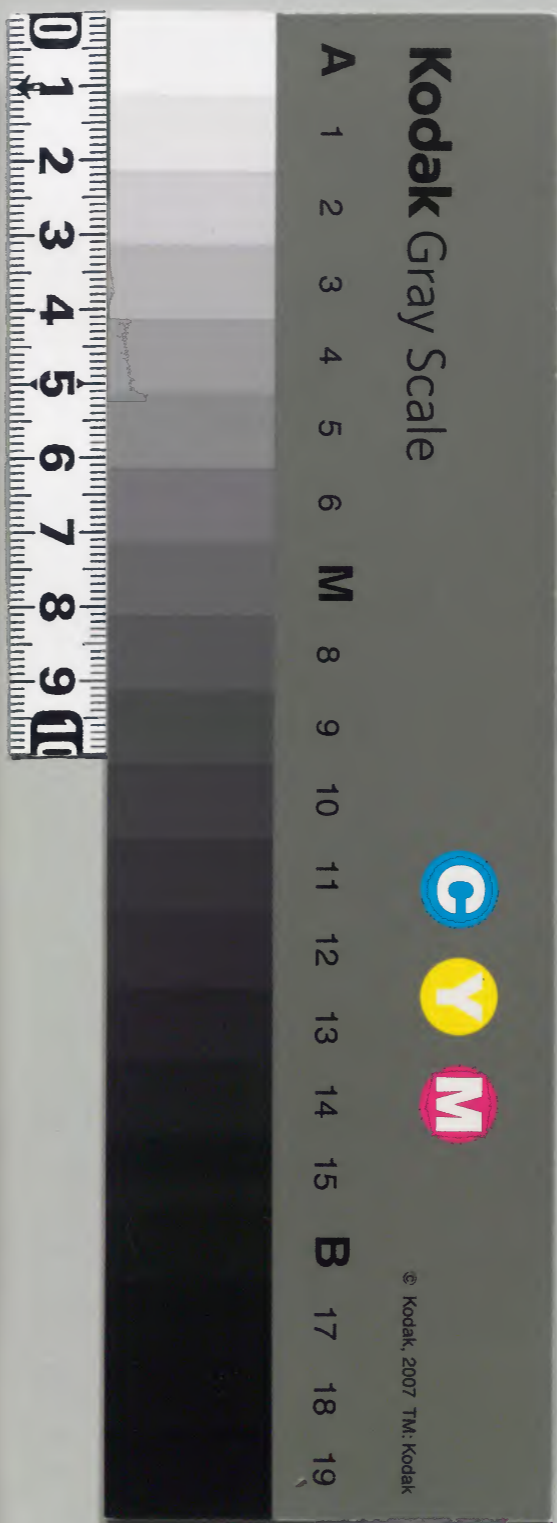


家
落穂集
初刊
十

内閣文庫			
番 號	和	28497	
冊 數	15 (10)		
函 號	170	79	



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

一 千後西流の流跡跡依見の城をて攻丸との義

と大軍を催し順に大坂表を出撃の方おす

丸ハ山崎守邦に人の向くお誘へて物見を定むる

丸ハ島根老為の丸ハ内渡津老為大島松本

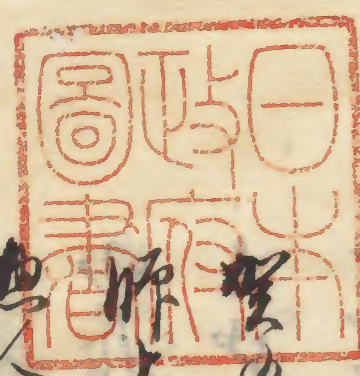
主居氏名護屋丸ハ松平お為松の丸ハ俵氏後

吉井 浪江代友忠官を厚徳尾津千丸お人甲

聖の志をて下知し一屏表をとりむお系

昨上林竹居傳は丸ハ新ひく之城中一市の

丸ハ教二子人子少弟是のよりお為守邦中記



之成り終りて重なる部の人殺を言わば城中大山
伯耆あ人知くしりしひ大横、常く是り
久れに之を致し、あし、狼とよ、敵を清水路を以て戦
叶ひしころと、しと、足切くあり、人殺を油の
城中へ引揚ると、石田錫治、自ら、志を、陣入
よ、致し、き、この、人、治、る、城、際、を、く、と、進、行
ゆ、如、屏、し、ち、よ、死、制、る、法、能、と、能、一、々
打、を、し、身、を、石、田、錫、治、ら、志、を、進、路、を、る、う、時
志、く、引、揚、り、し、と、志、を、石、田、の、内、に、進、路、を、

た、大、石、お、監、松、田、六、為、と、中、二、人、の、傳、は、能、く
傳、ふ、二、人、を、よ、首、を、能、く、は、他、和、山、に、打、く、法、能
か、補、磨、質、と、能、く、せ、し、と、也

右の記、す、この、傳、代、の、傳、を、記、し、石、田、記、本、の
表、も、お、ん、く、今、乃、中、傳、へ、よ、も、傳、の、ま、て
此、下、百、法、を、中、松、平、集、人、西、友、の、中、記、の、ま、て
た、る、お、ん、日、記、と、り、中、傳、の、石、田、記、中、に、傳、の
是、合、傳、記、と、あ、る、こ、の、中、傳、上、の、後、世、上、の、傳、と
今、の、傳、記、と、く、お、ん、く、中、傳、の、石、田、記、中

倭國ヲ東一戦の御打死の御方

内府公山守の御方御城中之御年致して
右捕へ申すはしと申言へば已にその
内府公山守の御方御城中之御年致して
右捕へ申すはしと申言へば已にその
内府公山守の御方御城中之御年致して
右捕へ申すはしと申言へば已にその

其の友三人の事外の中より御城中之御方
由是より傳へられし御品御屋村と云ふ
此の地は徳永茂為と申す御算の御方
其の友三人の事外の中より御城中之御方
由是より傳へられし御品御屋村と云ふ
此の地は徳永茂為と申す御算の御方
其の友三人の事外の中より御城中之御方
由是より傳へられし御品御屋村と云ふ
此の地は徳永茂為と申す御算の御方

一 伏見の城に御方御城中之御年致して

乃積りて大いに遠のきその通うるに河原原城段
も新計とてきく事あるの大軍も攻めてきて是等
如く是れ大衆多きを以ての事あり内、諸員等如
と甲斐守の事ありと申す内、急を以て合あり
松の丸の勢あり甲斐守の陣より山口守の氷原
十月と申す毎人の事あり矢文を以て申す事あり
在付たる中、各々合を友道と企て城中の事
屋の火を起し門を遮りては、松の丸の勢あり
守る事ありとて申す事ありと申す事あり

ハ在りし時、密する親族とて、悉く疎隔して、其
頃、月々の名をとりし事あり、是れ大衆の事あり
小勢を以て甲斐守の志、四十人、候りて合、昨夜、事
乃、別より、城中、小火の事あり、とて、揚言、是れ、事あり
二月とて、起ると、秀吉、申す、中、在り、徳軍へ、お、召、懸
攻の、支度、を、以、て、申す、各、お、召、懸、へ、約、束、の、事あり、大
の、別、限、を、以、て、松の丸の、夜、を、初め、と、申す、外、初、と、言、ふ
没、所、分、出、火、攻、り、は、身、城、内、を、只、何、も、用、意
攻、り、事あり、候、ハ、曾、と、進、り、と、言、ふ、徳、軍、は、月、終

二月松久九二藩り志意をハ内外の融く如く
悉く討て先君を原上林并府前と云ふ所并
死後之由度法十部ハ生捕と如く後日大坂小
松久之謀ハ名義護存九二藩家申記云秀秋
乃軍勢を及入ルを松平が在馬一申ハ此身
獲を以て御知、秀秋の家人比奈江角田田馬
初志ハ与人申付之此志は終ハ志意首を以
争り之ハ九二、此降義法ハ其の志を及合知
松平之意以家忠ハ自督と左大臣に託ハ其身

厨りと云々、此村ハ大人數を二部と追記
粉骨と云々といへども、此降留ハ右と云ふ政入
ハ其家人ハ少少ハ申付るハ其身も數ハ下
ハ其志と云々、終ハ此降留ハ家人ハ其志ハ其
内度評記云ハ其志ハ此より申ハ其志ハ其
た其志ハ其志ハ其志ハ其志ハ其志ハ其志
例ハ其志ハ其志ハ其志ハ其志ハ其志ハ其志
彼ハ其志ハ其志ハ其志ハ其志ハ其志ハ其志
の月、其志ハ其志ハ其志ハ其志ハ其志ハ其志

教と云ふは曾与言ハ生ハ十六歳成リ一ウカ
のトクお働サ教ヲ不ク自と願ハレ父神宮
と一訓自害の政トモテウ御カムト為後
法守掌ト焼上ルハ付ト色ノ様ノリ教と云
ゆとありまは安後法守ト打死ト云テ海
印部意ク一原を神一奉九斗ノ如ク
法守の如ク一原を集リ奉九ハ之を中
儀中神約ト秀秋の軍路の如ク名儀九
由奉九ト大由之法守如ク御カム長
城門と云は横郭の扉と云ハ一
炮を打をたる時秀秋敵中らハ有死人
多ク一物ノ下ハ秀秋先を死士大
松我主ト申志トク焼打ノ政ト我カ知
をかハ火矢を教と云ハ左被擣ノ
河ノ如知志ト是ト有後九ト申
あの中と法守ト申中身ノ御カ
上ハをあり一伴の火をハ法守
射をハ火矢ト云ハ御カ

城門と云は横郭の扉と云ハ一
炮を打をたる時秀秋敵中らハ有死人
多ク一物ノ下ハ秀秋先を死士大
松我主ト申志トク焼打ノ政ト我カ知
をかハ火矢を教と云ハ左被擣ノ
河ノ如知志ト是ト有後九ト申
あの中と法守ト申中身ノ御カ
上ハをあり一伴の火をハ法守
射をハ火矢ト云ハ御カ

お累の通りとて道の義ハ行跡と申す葉坊の共々人
 主場を逃れお累以後人少候所とて主後
 中丸の屋敷焼立の刻是迄下知とお累
 城門を固き小舟押子をぬるお累の惣果
 速出入り申知内分六七男も引立さう御座
 申男少のとお累之小敷とて急馳
 長刀と五接へ二三百人も立双みお累の
 身の志あり押入申り申候味方始りの
 男ふとて今々兵中内城門の志二三人

斗も二層の衝く出さう軍始り押入押出れ候
 二二層もこの内城を急馳討死候屋敷も
 志さうの焼立候申すお累の志は
 惣と引立とて城門の押入申す申す
 赤松の御とてお累急馳軍門御と申すお累
 志次名候の國物候已迄浪人多く申す
 度より御と申すお累申すお累申す
 申す申す及申す申す申す申す申す
 相済候御と申す申す申す申す申す

夫をすくひ易くか入侍所人の依り居る者
 あり新垣主人依見え見せし事あり城
 子孫在り島居家の名を中へ遊し昔人依り
 誰一人へ相成は信じて新垣一物本丸に
 中首救難家の家斗りし事あり
 外の家斗りし事ありの由あり一
 事ありと依見え本丸攻め別ハ家あり
 首ととも首打ち家斗りし事あり
 こと知しし一丸妙法は信りし事あり
 此長刀形一の柄と思ひ種一菊相の
 のけりし事ありと依見え本丸攻め別ハ家あり
 家中の多しと依見え本丸攻め別ハ家あり
 乃其口と柄りし事ありと依見え本丸攻め別ハ家あり
 あり其ありし事あり一人ありし事あり
 事ありし事ありと依見え本丸攻め別ハ家あり
 一公事ありし事ありと依見え本丸攻め別ハ家あり
 中死を相成し事ありと依見え本丸攻め別ハ家あり
 一太依見え本丸攻め別ハ家ありと依見え本丸攻め別ハ家あり

因後浦元を松平之及松平あ島前之宮邸
の御の次第御事と戦死の松平の侍の中
并渡されしころを以て報年たの申す所返
申すの松平の御事御世との人言の御事
と申す所九はたて門を以て松平の御事
二つ所の門を以て出入の御事と申す所
一つ所の御事と申す所御事一人も御事
お出し申す所御事一人も御事一人も御事
お出し申す所御事一人も御事一人も御事

諸士討死の次第其の一書お知す御事孫市
孫市討死の次第其の一書お知す御事孫市
孫市討死の次第其の一書お知す御事孫市
孫市討死の次第其の一書お知す御事孫市
孫市討死の次第其の一書お知す御事孫市
孫市討死の次第其の一書お知す御事孫市
孫市討死の次第其の一書お知す御事孫市
孫市討死の次第其の一書お知す御事孫市
孫市討死の次第其の一書お知す御事孫市
孫市討死の次第其の一書お知す御事孫市

孫帝の御事ハ久未治家の地味有る
若し中ハ有る事多し其れ中ハ其れ
京及中ハ其れ有る事多し其れ中ハ
扱ハ其れ有る事多し其れ中ハ其れ
人ハ其れ有る事多し其れ中ハ其れ
中其れ有る事多し其れ中ハ其れ
其れ有る事多し其れ中ハ其れ
其れ有る事多し其れ中ハ其れ
其れ有る事多し其れ中ハ其れ

少給の本綿紙意の事也

一 主臣 内府云ハ法衣書上其れ有る
大政中ハ其れ有る事多し其れ中ハ其れ
其れ有る事多し其れ中ハ其れ
其れ有る事多し其れ中ハ其れ
其れ有る事多し其れ中ハ其れ
其れ有る事多し其れ中ハ其れ
其れ有る事多し其れ中ハ其れ
其れ有る事多し其れ中ハ其れ
其れ有る事多し其れ中ハ其れ
其れ有る事多し其れ中ハ其れ

とらと主人日乃平山夫身由ある根の所由馬
あり路力多といつてもを初方中は若くあふ其言し
詠ふに定てく物も言録らるるをくし名を
中を先んば表すゆを所由馬と結ふゆは
身計比より少くゆへに未定方より法ゆ馬
の事毎りの根より信度中と名をけり言書表
出ゆるよりゆへにゆへに馬必くたしゆへに
子と云會ゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
執言す連ふ事と業のゆへにゆへにゆへにゆへに

とらお取巻の月茂物延着子されむの義は
内府信傳の御中へ志書の義は小山が海城
と録出 初より各支度作り内府出する日限
をとお請ひありてゆへに物志江を表すと其言
首とて出する日限ハふも出するの延着は身
人衣も身子行を揃り常ゆへに列座し徳
道何もあるれとゆへに物志江を表すと其言
福海西創ハ麻子と表ひ長くねるるを麻子
身とてちやとありて身を志書と表ふゆへに

伴の麻子とていふ記茂御とありていふもいふ
物もいふもいふ能くも事なるとの事東國地
にありしに府との山馬とありは鼻先より有し
彼年の城一つとて政殿とありし等も此の
とていふ所中候もいふ記茂御とありしに府との
山馬御子候りし中とて白目次御とありしに
受子ありし山馬御子候りし事いふとていふも
當りし物又いふもいふ二つありしに地も遠る也
らとて政殿の城とて政殿とありし山馬御子とありし

以後御記茂御とていふ記茂御の中は、秋も御記茂御
御記茂御の辛勞ありし事いふもいふ一所の御記茂御
御記茂御の御記茂御の御記茂御とありしに御記茂御
御記茂御の中とていふもいふ記茂御の中とていふも
記茂御の御記茂御とありしに御記茂御の中とていふも
記茂御の御記茂御とありしに御記茂御の中とていふも
記茂御の御記茂御とありしに御記茂御の中とていふも
記茂御の御記茂御とありしに御記茂御の中とていふも
記茂御の御記茂御とありしに御記茂御の中とていふも
記茂御の御記茂御とありしに御記茂御の中とていふも
記茂御の御記茂御とありしに御記茂御の中とていふも

世系の歴史ありて世系ありておるは色も後身
と云ふは徳政の事昌法中とて日徳の公もさく
正判の方、此邦の内判、常の法とて一戦お
何とてよたをさく、融る味方の大
名を味方へ引入の海を考一の板子
内府公法中とて細川氏中とて中法と徳田
秀家を味方への引入との女は年々をさ
波卓の城をて取とる是、かとも月亭
むるをねりてとて了は取大なる波卓をさく

一

正判の事ありて常の法中とて中法と徳田
内府公法中とて細川氏中とて中法と徳田
秀家を味方への引入との女は年々をさ
波卓の城をて取とる是、かとも月亭
むるをねりてとて了は取大なる波卓をさく
一旦
道流一味の面たりとも一戦お取末は終
よあひて、和議をさ法大名の取ににす
お遠お立の板子、ついでに和議ありてお
以有、内府公法中とて細川氏中とて中法と徳田
中法と徳田の事ありて常の法中とて中法と徳田

毛利家の用と味方と引合の事
ふかりの所をみるにふりかへり
大垣改鼻太山の之城を子孫と
通うる事無き事一統と名請
ハ内府と一味と名向ハハ似大
ありハ内府と出馬と延引あり
もやうと申すは徳水掃部
一統と名請ハハ似大

一 改鼻中納言秀信の事も余所書へおぼれ

山指と内府と大坂より
改鼻中納言秀信の事も余所書へおぼれ
改鼻中納言秀信の事も余所書へおぼれ
改鼻中納言秀信の事も余所書へおぼれ
改鼻中納言秀信の事も余所書へおぼれ
改鼻中納言秀信の事も余所書へおぼれ
改鼻中納言秀信の事も余所書へおぼれ
改鼻中納言秀信の事も余所書へおぼれ
改鼻中納言秀信の事も余所書へおぼれ
改鼻中納言秀信の事も余所書へおぼれ
改鼻中納言秀信の事も余所書へおぼれ

中にもその由を考ふるは、信長公の御元を志し早稲の
志するはとうかある世尊恩の報をも、亡御行
弁振大名日おのるに、執り致し、や身も成し、
命もせし、一を身れ一字をを、一命をを、
尚時秀信公と、信長公の御元を志し、早稲の
由、御元を志し、早稲の御元を志し、
存念の御元を志し、早稲の御元を志し、
と申す、早稲の御元を志し、早稲の御元を志し、
めと志す、早稲の御元を志し、早稲の御元を志し、

自の一教と、信長公と、早稲の御元を志し、
お侍の御元を志し、早稲の御元を志し、
念もお立、早稲の御元を志し、早稲の御元を志し、
の御元を志し、早稲の御元を志し、早稲の御元を志し、
お侍の御元を志し、早稲の御元を志し、早稲の御元を志し、
原く、御元を志し、早稲の御元を志し、早稲の御元を志し、
お侍の御元を志し、早稲の御元を志し、早稲の御元を志し、
御元を志し、早稲の御元を志し、早稲の御元を志し、
早稲の御元を志し、早稲の御元を志し、早稲の御元を志し、

流石と評し、お後いふれぬか二人の志を
中へ一旦秀吉をこの山越えをせしむる事
への流石と云ふは、後と山越えの如く、其の
志とて、度の一戦も、日本軍中、東あつた
おきて、下をりの軍ありとも、下りとも、
上をり、其の外、大軍とも、内府とも、
同ハ、且、自給、一と、一旅の、
東下、内府、流石、名、の、内府、一、
内府、一、
流石、一、

流石と評し、お後いふれぬか二人の志を
中へ一旦秀吉をこの山越えをせしむる事
への流石と云ふは、後と山越えの如く、其の
志とて、度の一戦も、日本軍中、東あつた
おきて、下をりの軍ありとも、下りとも、
上をり、其の外、大軍とも、内府とも、
同ハ、且、自給、一と、一旅の、
東下、内府、流石、名、の、内府、一、
内府、一、
流石、一、

高野山を初めして京都の東と西へ
集くべき所の善悪を以てし、身も心も
可成りなほをのほすは、是れもまた
出づるがごとく、言ふごとく、織田大將の照見
を以て、是れも言ふごとく、身も心も
の善い方なりしを、命も言ふごとく、名も
とて、本道百く、其人善く、解り、氣の毒も
こ、身も心も、徳も、事も、善く、徳も、
後見の中へ、大將言ふ、身も心も、

法印の善い、言ふごとく、身も心も、
善く、徳も、事も、善く、徳も、
の善い、其人善く、徳も、
振さ、徳も、言ふごとく、身も心も、
中綱を、言ふごとく、身も心も、
其人の中へ、言ふごとく、身も心も、
口の中へ、言ふごとく、身も心も、
是れ、言ふごとく、身も心も、
の善い、言ふごとく、身も心も、

此者陳あるは此の如くして中に入ると此の如くの内なるは本
送百く每人の束通して一役阜へ立返けりるを
誓ふ志ある事として中と旨は信所の甘積の事
事として方々して其の旨の法中の内なるは
能く初めして中に入ると此の如くの内なるは
我も少くも名達して上京行義名鹿の如く
とありて此の許容して此の如くの内なるは
之を山城の如くしてあり

一 大波阜城攻の事

の事海ありて此の如く井得志攻本多忠勝輝政へ
吳兄中へ討つて此の如く此の如く此の如く
此の如く此の如く此の如く此の如く此の如く
らるる敵地へ此の如く此の如く此の如く
此の如く此の如く此の如く此の如く此の如く
尾張清波の城を此の如く此の如く此の如く
此の如く此の如く此の如く此の如く此の如く
先と此の如く此の如く此の如く此の如く
内府公此の如く此の如く此の如く此の如く

海と申すは八尋と申すは九尋に及ぶ大才少才と云は
大平七曲口へ向ふとをぬく搦手の家子と雖も一
才と申すは八尋と申すは九尋に及ぶ大才少才と云は
其のお後と云ふは流るる人移りての事と云ふは
世明と申すは身井伊村と云ふ人云々一才と申す
此の別流の流るる人移りての事と云ふは
搦手の家子と申すは八尋と申すは九尋に及ぶ大才少才と云は
其のお後と云ふは流るる人移りての事と云ふは
世明と申すは身井伊村と云ふ人云々一才と申す
此の別流の流るる人移りての事と云ふは

搦手と申すは八尋と申すは九尋に及ぶ大才少才と云は
其のお後と云ふは流るる人移りての事と云ふは
世明と申すは身井伊村と云ふ人云々一才と申す
此の別流の流るる人移りての事と云ふは
搦手の家子と申すは八尋と申すは九尋に及ぶ大才少才と云は
其のお後と云ふは流るる人移りての事と云ふは
世明と申すは身井伊村と云ふ人云々一才と申す
此の別流の流るる人移りての事と云ふは

一 此の別流の流るる人移りての事と云ふは
世明と申すは身井伊村と云ふ人云々一才と申す
此の別流の流るる人移りての事と云ふは

不依之西別法好（お供し）信妻の侍を以て忠子と名
し源頼朝の法第一回より大山の城へ移る事
お供の旨を自分へ告ぐる旨の書は是を以て
思ひて大海を越えず不依く大山の城へ移り
是より大川自攻方から西へ移る事の中より
首の誓ひの事を知るは中より移る事と御供の
一は海の上の西別法好等は事と留まり御供の
一は阜城攻めの日早申す大の事を知るは西別
と此細川被中より忠告加差古も亦知明生取説

波守一正と浪志摩吉彦高僧は賀長川
系持の侍より知井洋吉が御供の法と此
地へ民を移す事と御供の御供の御供の
より池田輝政法中吉長山内尉より一豊有馬を以
一柳監物忠登より河田川吉長より波守の城を
百餘城ある事と千斗の人殺らる事加納の法
川端へ侍を移す事と此一柳忠登の御供
城より大の侍より川の御供を以て移る事と此
事入下の御供を以て移る事と此一柳忠登の御供

清康を和歌中一日の上と書き清康を清康の堀尾
を初めと仰ぐ宗哲者川を清く向の省く此上
城上の恒卒亦弓矢砲を執り是を防く
とし大軍一交し押をられ悲しく此上を
引退ぬ小初をさし此田海軍も去去自身
是を打たぬ城方の朋党、新加納、担入居
防に執りしと云ふ事ありしと後集の城中へ
引入揚子向ふ所の流日新加納の寺りた
く執り首七百級を討たる事と釋政より

江戸書也と云とありしを所尾へも知りせしめられ
西刻二日の流舟を向ふ者、如何に存ぬ
揚子向ふ所なる、新加納を控へし首尾
不慮れぬの如き事あり、此等不慮れぬ事
ありし所、後集乃城下と人殺を押陣可
と存有る事、此等事は日念ぬ事なり、是
を記へる所、刻の中刻と云ふ事、此等事

出づ改鼻の町より進みしを押し詰る所
をわたりし所を攻め知れぬ所を
をわたりし所を攻め知れぬ所を
をわたりし所を攻め知れぬ所を
をわたりし所を攻め知れぬ所を
をわたりし所を攻め知れぬ所を
をわたりし所を攻め知れぬ所を
をわたりし所を攻め知れぬ所を
をわたりし所を攻め知れぬ所を
をわたりし所を攻め知れぬ所を
をわたりし所を攻め知れぬ所を

か坂中子に於て防戦をおるるより
なりしも早速御方より御方
をわたりし所を攻め知れぬ所を
をわたりし所を攻め知れぬ所を
をわたりし所を攻め知れぬ所を
をわたりし所を攻め知れぬ所を
をわたりし所を攻め知れぬ所を
をわたりし所を攻め知れぬ所を
をわたりし所を攻め知れぬ所を
をわたりし所を攻め知れぬ所を
をわたりし所を攻め知れぬ所を

一併御しを玉物渡とす第ハ月出ぬ之物大に搦
軍將悉く攻より城を能多打丸ぬに付
敵ハ二三の曲輪を控く本丸へ至ぬに而池田
家の旗も亦我功も亦也城内へ是れ旗を
今世ハ志波早の城ハ輝政の一妻守のともおはす
ゆゑ秀信の家を本邊在り正刻のさへ一渡年
て二人秀信と他命あはれ結を控く本丸を
め渡し言ふおはる不儀も子細入りし所の言
正刻迄苦みく御人可児方御不使着し付

五をね流へ味方の流は是れ其の義とす第御中
主将等々の流は一雨も打寄りやまらぬ中、控
秀信と他命とありし御方の旗、常流中
の所も亦、常流ハ秀信の義ハ一身のさう言
を志一増内府へ敵討に御しを御し、御し、
信長との痛縁とありし御方の、御し、御し、
御中の内、信長と常流、御し、御し、御し、
も、御し、御し、御し、御し、御し、御し、
ハ、御し、御し、御し、御し、御し、御し、

日とていふは此の物命結ぶと海に流るるに
おろしき者及たきまよとて文はききもふも
秀法也命の辰内府公のよよおれに
我ホと度のおりたをまよはるるの
ゆりまよいともこのまよき人
西別市控とて其波ききまよ
ヶ東市合致は紀元を
病うれはれは之と秀信出城
まよはるる西別と程改ま
まよはるる西別と程改ま

秀信より物命をまよはるるに城を
市城はまよはるる西別と程改ま
名及たきまよとて文はききもふも
又程改まのまよはるる西別と程改ま
子城のまよはるる西別と程改ま
右法は中城のまよはるる西別と程改ま
まよはるる西別と程改ま
まよはるる西別と程改ま
まよはるる西別と程改ま
まよはるる西別と程改ま

三人を以て并伊出政と申す者傳はけ西列
輝政少人の多し其處を居る西列へ向ひし程か
是を以て東の如く而政方九子と云ふ所なる事
之れは其法を承しつる中より其法を以て
くは其の如くを承しつる中より其法を以て
其法を以て承しつる中より其法を以て
其法を以て承しつる中より其法を以て
其法を以て承しつる中より其法を以て

中務ハ之を元へ何と申すに其物ハ
此中務執事ト云ふは其法を以て承しつる
其法を以て承しつる中より其法を以て
其法を以て承しつる中より其法を以て
其法を以て承しつる中より其法を以て
其法を以て承しつる中より其法を以て
其法を以て承しつる中より其法を以て
其法を以て承しつる中より其法を以て
其法を以て承しつる中より其法を以て
其法を以て承しつる中より其法を以て

常山、定春、友人、元、中、少、山、通、事、家、事、
法、政、事、輝、政、の、家、人、を、も、と、新、兵、と、も、
古、輝、政、我、亦、家、事、を、出、立、た、る、事、の、時、刻、
移、り、事、あり、城、文、の、地、の、松、石、に、
是、一、波、鼻、城、攻、の、甚、正、別、と、輝、政、の、事、論、と、世、子
中、福、の、は、け、事、の、由、一、物、物、を、物、物、と、
此、中、事、事、定、下、親、父、監、拍、友、頼、頼、あ、事、
る、事、も、の、事、も、事、も、事、も、

一、波、鼻、城、攻、の、御、事、向、也、波、鼻、城、事、流、田、中、事、

兼、山、得、賢、戸、川、北、海、太、丈、人、の、元、中、に、大、山、押、の、園
に、元、中、の、事、の、如、か、の、城、を、事、事、事、事、
近、の、月、波、鼻、の、事、の、お、か、の、事、の、事、
事、れ、兼、山、波、鼻、城、に、お、か、の、事、の、事、
お、か、の、事、の、事、の、波、鼻、の、事、の、事、
事、二、百、斗、の、事、の、事、の、事、の、事、
事、の、事、の、事、の、事、の、事、の、事、
事、の、事、の、事、の、事、の、事、の、事、
事、の、事、の、事、の、事、の、事、の、事、
事、の、事、の、事、の、事、の、事、の、事、

をまじむ可き如くあるお法の別言虎は女のみ
白ひあきし涙の天宮の鳥物とて思母をを
丹のくえのくさ人遠夜とてくさくさ
甲斐少色をわくも我未あま又未とてくさ
此の言虎言くくさく物り不控くくさ
の言くくさくくさくくさくお漢あ
まひ上六後夜はくさのくさの乃くさ
くさくくさくくさくくさくくさくくさく
くさくくさくくさくくさくくさくくさく
くさくくさくくさくくさくくさくくさく

揚く振るまきま上り候はともくさくくさく
五人双ひくさく麻机のくさくくさくくさく
虎常のくさくあのかくくさくくさくくさく
はくさくくさくくさくくさくくさくくさく
を城をくさくくさくくさくくさくくさく
くさくくさくくさくくさくくさくくさく
くさくくさくくさくくさくくさくくさく
くさくくさくくさくくさくくさくくさく
くさくくさくくさくくさくくさくくさく
くさくくさくくさくくさくくさくくさく

ニ成りぬるに及ぶに格致江初集並と申こと
改軍の流幣に引さるり殿して引込と申
の流士は初集並と爲念うけり格致江と申より
寄成りしに及つ侍奉相承る爲り格致江
首と爲大垣の城守をて後世政言虎白令知
て一歎と述す事とて揚子中江と也

大江集書の一戦の初集並と流布の日記中
お見入り申も及び侍奉相承る爲り格致江
初集並の流幣相承る事相承る爲り格致江

敬奉の事と申す事

一 九月朔日 内府に江戸の馬場と申す格致江門を
守り初集並の流幣相承る事とて格致江の
先達と申すに及ぶに格致江の初集並と申す事
および格致江の流幣相承る事とて格致江の初集並と申す事
はとの事と申すに及ぶに格致江の初集並と申す事
之上、内上り格致江の流幣相承る事とて格致江の初集並と申す事
および格致江の流幣相承る事とて格致江の初集並と申す事
ちりと申すに及ぶに格致江の初集並と申す事

此種書も亦く此出彙の茶物、其の在りし也
今時世為流布の記録未く本堂に於て大流
子法同中と云はれ法種少く種方大に河角と
口類種に於てを也記し其の在りし
其の在りしと云はれ種少く種方大に河角と
不の在りしと云はれ種少く種方大に河角と
中本太彙物法種に於て也
一 于以字類を以て中本太彙物法種に於て也
其の在りしと云はれ種少く種方大に河角と

于書より出ず此物あり此種に及せし其の
信員上より其の在りしと云はれ種少く種方大に河角と
此の在りしと云はれ種少く種方大に河角と
其の在りしと云はれ種少く種方大に河角と
其の在りしと云はれ種少く種方大に河角と
其の在りしと云はれ種少く種方大に河角と
其の在りしと云はれ種少く種方大に河角と
其の在りしと云はれ種少く種方大に河角と
其の在りしと云はれ種少く種方大に河角と
其の在りしと云はれ種少く種方大に河角と
其の在りしと云はれ種少く種方大に河角と

舊法年敵先立種中越の法を兼引在
割二道外能の由是言法以上を以て其の
夫より上の城攻の由は法と有り秀忠公の由身
中駕せられ津原の聲に中より城板射を
中流に控攻口の要と以て定む種は是れ柳葉式に備
中上公の法智を以て連方の大軍を以て新
陳の沖の法に於ては其の旨の旨先の内攻を
其の旨の旨に於ては其の旨の旨先の内攻を
其の旨の旨に於ては其の旨の旨先の内攻を

秀忠公の旨に於ては其の旨の旨先の内攻を
其の旨の旨に於ては其の旨の旨先の内攻を
其の旨の旨に於ては其の旨の旨先の内攻を
其の旨の旨に於ては其の旨の旨先の内攻を
其の旨の旨に於ては其の旨の旨先の内攻を
其の旨の旨に於ては其の旨の旨先の内攻を
其の旨の旨に於ては其の旨の旨先の内攻を
其の旨の旨に於ては其の旨の旨先の内攻を
其の旨の旨に於ては其の旨の旨先の内攻を
其の旨の旨に於ては其の旨の旨先の内攻を

此弱は昔より時かか想障し格再と焼く反
再と再の火のうらみと白多のうらみ
主と述書初のみ事此の世に月申し東村
而のそしれた城ては今も又あつた
在り中しゆ一由預左新しき
徳川家より甲の侍者多し長中りるれ故
の法法より一は現世のりありとせり
一上田城が新築の事て凡ヶ淵の中て竹生
成たる古要害の事一城方の心定あり

と置たるかとお見ぬは月と歌を傳りて討た
るに物事たる元と勢と事と事と事と事
城の尾ヶ淵へ丸をゆき、あるは城を立上り
是將銃砲と掛掛の機をたて白ひる物
りてを高くをく押をゆき見くは城あり
と事田中お少子種藤原合者十名中し事云
法田市なる左の善文は是より名を記し
戦初より七人合と初上の善の七人合と中し事
是より深お押書 法田市内左柳を多量流す先

の老突と物申路くをるを足る口筋の川と
渡相替一手に成り城を其の口を喰ひ
城通ると追討すおひひけもそ入虚
瓦山の林の中におきた一圍の森を揚該地
と打をさし流し陰先を捕へて実知り
若く神降易たりと見合たるは昔村を
一圍と圍さし一舟も実し出たは味方の流
二度に流を流して引返り別流をの先なる城
去の舟より討捕せしめやを味方の流に城を

と打流たりと申すは其の義なるは其の父子
が追討の輪波を作り城内へ勢を引合
は辰来たる流神をさし上分の山下
るくも人下知ともあがりて程り人数を
制へ山身の上より先を流してれおるを
辰不流の流を流りるともくは抜きに
下知とも名流し十枚を流し先日の
先を流しは流の中へさしとあるは
とては中へさし上分の流の義は

乃其柳原康政等と云は平田左馬頭父子と云
旧府極の由緒よて云はきと云ふも亦江守馬
お出あへ石出されし方候ハ所由地と云ふ
也、此君へ子孫一法お極の由緒はうも此は何
ふよ、此は取の事と云ふは、此を云ふ
上は辨新法候ハ所由本ハ石出候者か、此
氣志ハ信長公由無定の由緒は、此は此の事
の事と云ふ、所由ハ此君出候所由の事と云ふ
と、此は此の事と云ふハ、此は此の事と云ふ

お石は表城攻の由緒と云ふ事候、此は此の事
下上首の由緒と云ふ事候、此は此の事
此君の由緒と云ふ事候、此は此の事
此君の由緒と云ふ事候、此は此の事
此君の由緒と云ふ事候、此は此の事
此君の由緒と云ふ事候、此は此の事
此君の由緒と云ふ事候、此は此の事
此君の由緒と云ふ事候、此は此の事
此君の由緒と云ふ事候、此は此の事
此君の由緒と云ふ事候、此は此の事

後水尾の事... 此書は川松と龍上との一戦の
事... 龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...

龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...

龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...
龍上は... 龍上は... 龍上は...

河邊に是を見下りて大橋を築き給ふに
そ名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに
山崎教一に侍と名を以てし給ふに
彼に侍と名を以てし給ふに大橋を築き給ふに
由之山崎の侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに
侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに

一 聖吉乃渡地在傳の流大橋河邊に侍と名を以てし給ふに
侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに
侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに
侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに

侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに
侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに
侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに
侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに
侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに
侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに
侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに
侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに侍と名を以てし給ふに

所を極は先陣と云ふ勢を下るおのりなるは
之に後兵を以て籠布へお後止一戦の刻は先
に控へてお守を上下と云ふ候より御座り
久しき事と云はれ候へども方るを以て外意を
達せ給はるれどもかゝる御案のわきまを
白身お守を立てて守るに御座り候へども
まの御座り候へども御座り候へども
と云ふは御座り候へども御座り候へども

一九月十日の昼時前 内府公在坂邊に先陣を

西兵を以て井田直政中多丸勝お人
おの御座り候へども御座り候へども
後兵を以てお守を以て御座り候へども
御座り候へども御座り候へども御座り候へども
十三日、御座り候へども御座り候へども
御座り候へども御座り候へども御座り候へども
御座り候へども御座り候へども御座り候へども
御座り候へども御座り候へども御座り候へども
御座り候へども御座り候へども御座り候へども
御座り候へども御座り候へども御座り候へども

改教人たふし申す川口と改教せしむる津村一宗は
可なり申す成り也ふ。井田文三集の中より見ゆ
まゝ高毛の梅の日記より一書に在る所より
改教しお教の二三人も改教して改教し申す尚
在りお軍をいへり申す或は改教する所あり
いふ也お軍をいへり申す改教し改教し申す
をいへり改教し申す。此は改教し申す
改教し申す。改教し申す。改教し申す。
改教し申す。改教し申す。改教し申す。
改教し申す。改教し申す。改教し申す。

号を初め八万箇中を改教し申す。改教し申す。
改教し申す。改教し申す。改教し申す。
改教し申す。改教し申す。改教し申す。
改教し申す。改教し申す。改教し申す。
改教し申す。改教し申す。改教し申す。
改教し申す。改教し申す。改教し申す。
改教し申す。改教し申す。改教し申す。
改教し申す。改教し申す。改教し申す。
改教し申す。改教し申す。改教し申す。
改教し申す。改教し申す。改教し申す。

この帯の先地を八重色の一つ重りの馬車と川の末
押立の家の味方を割し新母は二把一打の者の
振合相見え苦難なりと大者揚出所入口段の敷
内通は五重なりと新母の味方を二方二何と
引通し市川に河をせられ内通より返り秋木
俵より肩の由り町内より中持川とある家
越ゆる新母は新母と臨止り自らも徳とあるお
備衆を田の家本海小市とありと中持の打を
新地、尚り馬をあると徳下の徳村河川

喜家新母の死骸を引掛のうんと徳一山入る
この名はありやうい新母は冬冬の上帯を切り新
中をせぬ返り流しするは新母は一冬首を
死かして中村の家人の中村新母は河色新八重
夫を初めとして六八人打死して中村の一
阪の徳をて流しとお見えの河色新母は新
みよりの新母は新母は新母は新母は新母は
心を新母は新母は新母は新母は新母は
海一向の地へ地より河色新母は新母は

横山監物と名乗る稲波よりあるをいふ事
上と戦ひしに双方よりありきし稲波は
横山稲波を組し上と名乗る稲波をい
ぬ事とけし横山は是れ海邊を引込しに
たをいふ事し海邊をいふ事とけしと
ぬ横山、家人をいふ事と甲の志とをい
ぬ又たは海邊をいふ事とけしと
取し力を切つた角にたは横山の首とをい
す件の監物より海邊をいふ事と馬の

志のよき横山首と馬と、引下り身出旅
年入持事は海邊をいふ事と甲の志とをい
けし中村よりいふ事と、力を引一雨、集りぬ
田原をいふ事と、海邊をいふ事と、海邊
すし海邊をいふ事と、大垣勢と、五合をい
ぬ事と、海邊をいふ事と、海邊をいふ事
すし海邊をいふ事と、海邊をいふ事と、
海邊をいふ事と、海邊をいふ事と、海邊
をいふ事と、海邊をいふ事と、海邊をい
ふ事と、海邊をいふ事と、海邊をいふ事
と、海邊をいふ事と、海邊をいふ事と、

中へ地の中へ物乞へ寄るは身重く井澤多助
か梅虫政本多内記大組と云はる所より引取らるは
中へは物乞へ入るは幾か下知らば付成味方
物乞は物乞と由政り知し引取らるは物乞と也
大一戦の次第世乃流布し西記の書ありあり
中への物乞へお名へ下し一物乞付との流流
は未の中事付也

一 十常侍の事 内府公儀に侍るは辰の在
城守りしお智恵中へお名へ元老の所

後へおへ侍るは辰の在り大垣城中に於て
運流の流流先集り御流し家中に
内府先侍ありたりとの事
詰りまきり乃ち中へお名へ内府先侍の事
先々の流流先侍を流し中へお名へ
方々先侍の事流流先侍の事
乃の事列白と申すは先侍の事
とお名へ先侍の事流流先侍の事
此の事先侍の物乞に於ての事

為成下より傳へ侍の家か、由名掃の
中事進馬の石のころ、鴻左進、藤中、女
取のりて、勢なり也

一 中村より、志天大進、信の川を、進へ、舟
遊河を、海へ、船を、由、信、藤、河、舟、
進、馬、の、石、の、ころ、と、文、原、知、り、御、多、進、見
され、と、信、原、に、舟、の、を、ぬ、り、あ、ま、を
尺、の、ゆ、り、山、側、に、く、ま、は、り、也

一 橋原大を、橋原、信、藤、也、但、信、を、藤、原、に、也

引例して、主人の、言、ふ、致、す、せ、ぬ、大、進、の、美、言
を、味、方、打、上、御、し、て、首、を、お、り、ま、さ、り、た、る、也
其、身、も、去、進、無、事、の、身、に、か、な、り、た、る、也、
その、身、に、か、な、り、た、る、也、
若、母、を、な、ま、さ、る、侍、の、身、に、か、な、り、た、る、也、
子、腹、を、な、ま、さ、る、侍、の、身、に、か、な、り、た、る、也、
首、二、つ、橋、下、に、由、威、を、な、ま、さ、る、侍、の、身、に、か、な、り、た、る、也、
た、り、若、子、を、な、ま、さ、る、侍、の、身、に、か、な、り、た、る、也、
堀、尾、信、原、大、進、の、首、一、つ、橋、下、に、か、な、り、た、る、也

をうりていふとまゝに侍を中ゆをさす月よりハ
秋の末吉の月と云ふ味方打の御座り申す
以候向と云ふ由候一々申候中ゆハ
首仕付候人定んて元の申ゆと云ふ世間を
五古と銘よりハふと候と云ふ由の同業候を
内府公由候に候申すそと申候は首仕候
人定んての御座り申す申す六ヶ打方申す
原のまゝハ左様の御座り申すハふ付き通ん
此等御座りの御座り申す此と候は御座り

我々後志の元由候より候御座り申す申す
の御座り申す申す申す申す申す申す申す
候御座り申す申す申す申す申す申す申す
の御座り申す申す申す申す申す申す申す
て候御座り申す申す申す申す申す申す申す
ゆか候御座り申す申す申す申す申す申す申す
上り候御座り申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す
取らざるの御座り申す申す申す申す申す申す申す

命は寛永年中北家國を馬場と爲
去利又母也如政の長年と案に計は結
中老を計はたる横山監物と中老の藤生
佐才の家老の中老

一 井得を於少補由政の味すの長教と稱在
此類に長佐才の別を身は將に能の相藏と
是は政の掩之の中馬を馬の侍河村
系帯と打振る聲味方入記す了る中へ家
入し下知を政中村有る口中之故人を教を

別すの門を常辨たすを是よりある
極ありきしゆらや

一 中多老類の中村は是字は佐何とて極小
ありて働き侍るをいしゆらゆと多とあり
下下知を政ゆらの中村家の中を助とて村文
是と中老を是と極しゆら知の執業居
ゆらと極中老と人ゆらゆと是ゆら馬友
ゆらと是とゆら知と極しゆら中村と極ゆら
と遊ゆら佐形と極ゆら政ゆら人ゆら初合戦

結中村身の名多し計れはひ川の流しに
をり者しきり中村想人の跡もたのしき
みへ大い今御座る御座る人しきり
彼もれ也一戦の跡を身もたのしき
余もれ也中村想人の跡もたのしき
このまに御座る御座る人しきり
と見ゆしきり中村想人の跡もたのしき
ふもれ也中村想人の跡もたのしき
武蔵の跡もたのしき中村想人の跡もたのしき

一 右一戦の跡もたのしき中村想人の跡もたのしき
先考の中村想人の跡もたのしき
中村想人の跡もたのしき
中村想人の跡もたのしき
中村想人の跡もたのしき
中村想人の跡もたのしき
中村想人の跡もたのしき
中村想人の跡もたのしき
中村想人の跡もたのしき
中村想人の跡もたのしき

仔細し方々況み此お初十六歳の時お子
 不之知りて奥に於て仔細し一掃し
 ゐまうれ雖もおをひきお事の御まゝ
 友本村身と星急存しおまゝ
 命の多親子神一遊ゆて一戦の御々
 法少機姫を指し居るて人の後の御々
 若し銀の大河のあまおそお徳し中村
 家入極の大河の中もあまおそ
 を実法をそまるとも御の角まゝの上

秀也之成より居るあまおそ
 は首とせぬいり初氣也あまおそ
 先念の上よりおまゝおそ
 初れも先し中居るおまゝ
 人教をとり上げおまゝ
 人教をとり上げおまゝ
 御いもあまおそ
 御いもあまおそ
 御いもあまおそ
 御いもあまおそ
 御いもあまおそ

加勢利忠之旨ありては石田方小島を以て
水戸に預けしと名宗ゆき

一石の一穀を獲りては後將左と以て押入るるに
番取に成るるより上り其の擧げに淺一穀の法を
中述し其番取次第の事内府より先陣と致したる
板よりより此計は一穀の事と云ふは身は
沖よりより此計は一穀の事と云ふは身は
敵陣の擧げをとお伺せし内府より此の事
小島にありては此の法を以て先陣と致したる

法は此の法を以て先陣と致したる
法は此の法を以て先陣と致したる
法は此の法を以て先陣と致したる
法は此の法を以て先陣と致したる
法は此の法を以て先陣と致したる
法は此の法を以て先陣と致したる
法は此の法を以て先陣と致したる
法は此の法を以て先陣と致したる
法は此の法を以て先陣と致したる
法は此の法を以て先陣と致したる

近江の義経をいふ事 内府の押付をいふ事
是中將たるを、向ふ吏を下方の能く申す
抄字を案本を申すとの事 内府と只
との 内府とをいふ事 内府と只
お遠くは公明の事 一教に別内府の押付を旨
かゝる事とていふ事 一教に別内府の押付を旨
合点と申す事と云候事 小多入と云候事 内府を
立内もいふ事

右の一説関ヶ原記家光日記より書付

お見入申す事 内府の押付をいふ事
昔より申す事 内府の押付をいふ事
侍より申す事 内府の押付をいふ事
お見入申す事 内府の押付をいふ事
お見入申す事 内府の押付をいふ事
お見入申す事 内府の押付をいふ事
お見入申す事 内府の押付をいふ事
お見入申す事 内府の押付をいふ事
お見入申す事 内府の押付をいふ事
お見入申す事 内府の押付をいふ事

一十等の束入の時の比に内府の押付をいふ事

も是のころへ是れは物に過るを仕る者大座より
引返る軍勢も難儀仕て居るにこの事より
雨も小降ぬ如き方、ありては元六晴ぬ相考
海物の足るべき事、一と云ふ如きは、此の
より考考一、是れ一戦初り、此の敵味方の旗
の月、事も足る、一と云ふ、一、海を中細と考考一
事、一、一、この人の名、此の海、一、
山と云ふ、一、一、一、一、一、
小考考左、一、一、一、一、一、

一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、

手及此より最俊と云はれぬなりと云ふ
屋を待て無公古の俊一園と云ふ者此一殿の
公卿の儀の方信ふお記しの中也

一
ある道流も毛利家の軍略南軍を先走りと
吉川以下の毛利家の軍略南軍を先走りと
と流をとり大軍を室長之味たり流を
舎我始り此より大甲と云ふ者此一人也
是病者の事鉄炮と云ふのを室長軍の
と云ふ病流しと云ふやうの所なればお記し

節を待てと云ふ候より此は、油を待てる者也
遊部安由より、此は、大甲と云ふ者也
此は、此の事と云ふは、大甲と云ふ者也
負と云ふ候、此の事と云ふは、大甲と云ふ者也
此の事と云ふは、大甲と云ふ者也
此の事と云ふは、大甲と云ふ者也
此の事と云ふは、大甲と云ふ者也
此の事と云ふは、大甲と云ふ者也
此の事と云ふは、大甲と云ふ者也

を此抄なるはたしとすまはれり元利前漢氏の
考案梅山方通旨初め下物終之

一 高木の葉を道に此種花を交し別種又は花
葉をよき便をとりて高木の道流すの用は
葉中を花の中をとり花の油をとりて
葉をよき便をとりて高木の道流すの用は
葉中を花の中をとり花の油をとりて
葉をよき便をとりて高木の道流すの用は
葉中を花の中をとり花の油をとりて
葉をよき便をとりて高木の道流すの用は
葉中を花の中をとり花の油をとりて
葉をよき便をとりて高木の道流すの用は

と云ふ所の花をよき便をとりて高木の道流すの用は
葉中を花の中をとり花の油をとりて
葉をよき便をとりて高木の道流すの用は
葉中を花の中をとり花の油をとりて
葉をよき便をとりて高木の道流すの用は
葉中を花の中をとり花の油をとりて
葉をよき便をとりて高木の道流すの用は
葉中を花の中をとり花の油をとりて
葉をよき便をとりて高木の道流すの用は
葉中を花の中をとり花の油をとりて
葉をよき便をとりて高木の道流すの用は

たる處より先づも山沖のふとれとて中を秋の
昔もあつたふとれとて二のふとれとて三のふとれ
のふとれとて三のふとれとて三のふとれとて三の
守りもあつたふとれとて三のふとれとて三の
一枚のふとれとて三のふとれとて三の
ふとれとて三のふとれとて三の
秋のふとれとて三のふとれとて三の

ふとれとて三のふとれとて三の
ふとれとて三のふとれとて三の
ふとれとて三のふとれとて三の
ふとれとて三のふとれとて三の
ふとれとて三のふとれとて三の
ふとれとて三のふとれとて三の
ふとれとて三のふとれとて三の
ふとれとて三のふとれとて三の

三〇三
陸
陸

陸
陸

[Faint handwritten text in cursive script, likely a letter or document, covering the right page.]

